

ここで、参加者アンケートを見てみましょう。働く母親たちは育児について「のびのびと育てたい」「スキンシップを大切にしたい」「でも「しつけもしっかりしたい」し、「健康は大切に」しなきゃ、それから「子育てを子どもと一緒に楽しみたい」と考えています。しかし、一方では悩みや不満も抱えています。

何が問題かと申しますと、「どうしても時間が足りない」「父親が育児に関わってくれない」「育児に対してストレスを感じる」「なぜ仕事を持っている母親にだけ負担がかかるのか」など。また、「仕事を持っていることで子どもに寂しい思いをさせているのではないか」「余裕がなくて子どもにじっくり向き合えていない気がする」といった声も多く聞かれました。

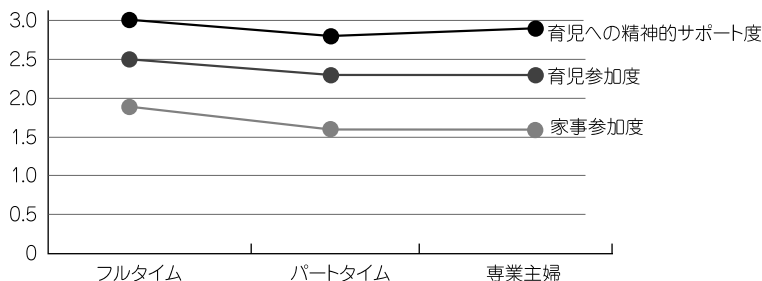
図5は父親の育児・家事への参加度を表したものです。「家事への参加度」が低いですね。母親が「フルタイム就労」の家庭の方が父親の「育児への参加度」「家事への参加度」がやや上がる傾向はありますが、実際のところは母親への負担はまだまだ大きいのが現状です。参加者アンケートでも「子どもが小さいときは、ちょっとでも面倒見てくれると精神的にもホッとします」「一緒に子育てしてほ

しい」「子どもとたくさん遊んでほしい」「困っているときに協力してほしい」「相談にのってほしい」という声が寄せられていました。また、一方で「いくら父親に育児に参加したいという意思があっても、会社や社会が変わらないとそれを許してくれない」という声も寄せられています。父親にも育児に関わってほしい、そのためには社会が変わってほしいという声です。

そんな悩み多き母親が父親とともに頼りにしているのが、図6にあげた人(場)です。「母親」「友達」「会社の同僚」の比率が高くなっていますが、ご注目いただきたいのは、「幼稚園・保育園」「小児科医」の数値です。「フルタイム就労」の母親は、「幼稚園・保育園」を大変頼りにしていて、「小児科医」を頼りにする割合も「専業主婦」や「パートタイム就労」の母親に比べると高くなっています。こういう方々を頼りにして、働く母親たちは育児を頑張っているわけです。

しかし、何かあったときに、保育士の先生や周囲の方から、「『お母さんが働いていらっしゃるから』と言われるのがとてもつらい」という話を聞いたこともあります。自分を責めて、

図5 父親の育児・家事への参加



*数値は、父親の関わりについて項目ごとに1点から4点までの得点化を行い、上記3つの領域について平均得点を算出したもの。数値が大きいほうが関わり度が高い。

ベネッセ教育研究所「第2回幼児の生活アンケート」より作成

ぎりぎりのところで頑張っている母親も少なくありません。そういう母親をさらに周囲が責め、追い詰めることが、はたして母親のために、そして子どものためになるのかと、最近考えます。

最後に、CRN が開設しているホームページのフォーラムからのエピソードをご紹介します。ある保育士の先生が1歳児のクラスを受け持っていた時のお話です。その先生が「お母さんと私と2人で協力して一生懸命育てましょ」とある母親に言ったそうです。それから20数年経ちました。たくさんの子どもを受け持ってきたわけですから、一人ひとりの子どものことが日々頭のなかに残っているというわけではありませんね。忘れた頃になってその先生のところに、あの母親から娘さんの結婚式の招待状が届いたそうです。結婚式当日、その会場に参りましたら、その母親が涙を流しながら、「あなたがいてくれたから、この子はこんなに立派になりました」とおっしゃったそうです。

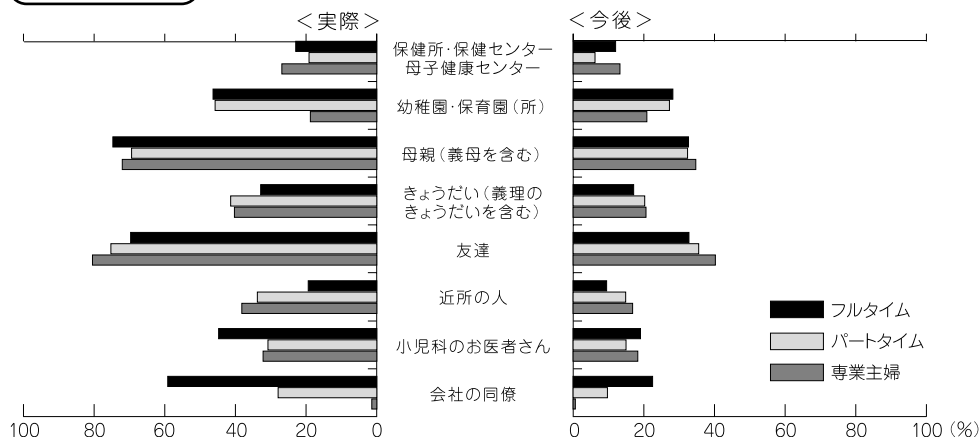
では、子どもはどう思っているのでしょうか。フォーラムから集めた意見で、もう成人された方が自分の子ども時代を振り返って「仕事を

持っている母親にこんなふうに言ってほしかった / こう言ってもらえれば安心できた」という言葉として、「仕事で参観日に行けなくなつて、あんたのおかんはここにおるやろ。寂しがらんでもよろしい。なんかあったらとんでいく。あんたが元気やから、おかんは仕事ができるねん」をあげていました。「何かあったらとんでいく」、そういう言葉がほしかったと子ども時代を振り返っていました。

ご紹介したように、お母さんも子どもさんも非常に頑張っています。今日会場にいらっしゃるお父様、保育士の先生方、そしてお医者様、研究者の皆さんにお願いしたいことは、決して母親を追い詰めることなく、「一緒に育てよう」と言っていただきたいということです。そうしたら、母親も子どもたちも、もっと楽しく生活できるようになるのではないのでしょうか。

この「一緒に育てよう」、社会のシステムが子どもと一緒に育てることができるようになるということが、21世紀に働く母親と、その子どもたちを迎え入れるキーワードになるのではないかと私は考えております。

図 6 相談先



ベネッセ教育研究所「第2回幼児の生活アンケート」より作成